

現代日本小說大系

46

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第四十六卷
支那小説

河出書房版

現代日本小說大系 第四十六卷

昭和二十四年十一月二十日初版印刷
昭和二十四年十一月二十五日初版發行



著者

川端康成

發行者

河出孝雄

編集者

中島健藏

印刷者

土岐佐光

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八
株式會社

河出書房

會員番號 A 一一〇一四番
電話 神田 (25) 三一七四番

現代日本小說大系(叢書)

改定 定價 貳百參拾円

地方管価 貳百四拾円

河出書房

目次

横光利一

紋

章

三

川端康成

雪

國

二九

解説（中島健藏）

三〇九

橫
光
利
一

紋

章

夜の大川端に沿つて走る自動車の窓に雨が流れつづけてやまない。私は助手臺に乗つてゐる雁金とききから話してゐたのもやめ、中潮に押し上げられる満潮とした眞黒な水面を眺めながら、今夜の雁金の計畫はどこまで成功するものであらうかと、早や疑ひが起つてきてならなかつた。ときどき、突き進んでくるヘッドライトの明滅する中で、降り下る雨足の燦然と輝き連る光芒が、ぐらりと急角度に一轉する度に、私は夢想から飛び退いて眼を見張るのである。雁金はと見ると、彼は恐らく私が彼に幾度も今夜の杉生との對談について教へたやうに、段取りを幾回となく繰り返してゐるのに相違あるまい。ときどき彼は胸のチョッキが膨らみすぎてゐないかと胸に手をやつたり、首筋を掻いてみたりはしてゐるが、多分、正直者の早口な彼は、杉生と逢へば、いきなり話の前後を顛倒させて、あけすけにぼろを饒舌つてしまふであらう。もうそれは私には眼に見えてゐることであつた。

目的の家に近づくにしたがつて雁金是不動の姿勢をとり始めた。今夜雁金が失敗すれば、彼の好機は後一二年の間

は先づ來ないと見なければならぬ。彼の横にある運轉手の戸川は雁金の目的を早や知つてゐると見えて、ときどき雁金の方に傾きかかつてはにやにやと笑つてゐた。これは雁金がチョッキの下の腹部に、彼の精製中のバナナの皮を保温するため、今も巻きつづけてゐるのにちがひない證據である。私は雁金が私の横の廣いクッションへ坐らなかつた原因が、この車が自身の管理を頼まれてゐる自動車店の車であるからだといふのではなく、腹部に巻きつけたバナナの皮の醗酵する臭氣を私に近よせないためだと、やうやく今ごろになつて分つて來た。

しかし、いよいよ芝の杉生家の玄關へ自動車に着いたとき、あれほど私が心配してゐたにもかかはらず全く意外な事件が持ち上つてしまつた。それは丁度私が停つてゐる自動車の中に坐つて、出ていつた雁金の再び戻つて來るのを待たうとしてゐるときである。私の乗つてゐる自動車とは別に一臺の自動車が玄關のヒマラヤ杉の横に停つてゐた。

始めは私も雁金も幾分固唾を飲んだときとて、その自動車には氣附かずにあたが、雁金が雨の中を小走りに玄關まで行きつくと、突然、光りを背にした一人の若い美しい婦人が玄關から送られて出て來て、よく延びた大跨な足で

裾除けを蹴りながら停つてゐた自動車に乗り込んだ。すると、雁金はその婦人が彼の横を顔も見ずに行き過ぎてしまつたところ、不意に何事かに気がついたと見えて、くるりとこちらを向き返ると、また車の方へ駆け戻つて來た。私は忘れ物があつたのだと思つてぼんやりと彼を眺めてゐたが、彼は私の車に戻らずにその婦人の後を追つかけていつた。しかし、雁金がその婦人に追ひついた時には、もう婦人が自動車に乗つてしまつてばかりとドアを閉めたときだつたので、間もなく大きくカーブを描いて自動車が鳴り出すと、雁金は引き摺られるやうに踏臺に足をかけたまま、窓を激しく叩きつづけて開ける開けると叫んでゐた。自動車は雁金を振り落すやうに濡れたヒマラヤ杉の中へぐさりと刺し込んで、急に強く走り出した。しかし、雁金は窓にしがみついたままたちまち自動車と一緒に見えなくなつた。しばらくの間唖然としてゐた私は、すぐ私の自動車に命じて彼の後から追はしていつた。けれども、私の出足は前の自動車とはもうよほど遅れて走つてゐた。私たちが門を出たときには、もう彼の乗つてゐる自動車は大通りを左へ曲らうとしてゐるときであつたから、私たちがそこまで出かけたときは、他の方から疾走して來る眼まぐるしく濡れた幾

臺ものぐるぐるした自動車が邪魔されて、どれがどれだか明瞭に區別することが出来なかつた。そのうへに、雲霧のやうに降りかかつてゐる秋雨の煙りが、ぼつとライトに輝き渡る度毎に、前後は朦朧として一層見えなくなつて來るのである。それでも私の運轉手は雁金の配下であるだけに、スピードを増して見る見るうちに數臺を追ひ抜いた。私は運轉手に雁金のゐる自動車の番號を覚えてゐるかと思つてみた。運轉手もうろたへてみたときと見えて、細いところは見えなかつたと云つて海底のやうな暗い大道を無茶苦茶に走りつづけた。しかし、うつかりするともう雁金は抛り落されてしまつてゐて、私たちより後になつて今頃はまた杉生家の玄關の方へ戻つてゐるころかもしれないと、だんだん私は懸念に堪へなくなつて來た。

「君、どれだつたか分つてゐるかね。」

「分りませんね。それに車がかうなつちや、これや駄目ですぜ。危い危い。」と運轉手の戸山が答へた。

「それぢや、もう後へ引き返して貰はうか。」と私は云つた。

それにしても、私は雁金のこの突然な舉動には發狂したのではなからうかと思ふ以外に、さつぱり理由が分らな

つた。私は戸山がもしかしかなら知つてゐるのではあるまいかと思つたので、それとなく彼に訊ねてみたが、彼も私同様、皆目何のことだか分らないと答へた。しかし、雁金の追つかけた若い婦人は人違ひでなければ、杉生家とは何らかのかかはりはあるにちがひないことだけは確實であつた。運轉手の戸山の話では、杉生家へ來たのは今までに度度あつたから、あの婦人は杉生家の令嬢でないことだけは明瞭だと教へた。私は雁金の前に話した杉生家のことを思ひ出した。杉生家は雁金の今ある自動車店とは親戚關係になつてゐて、自動車店主の押坂は雁金と故郷を同じくしてゐるところから、落魄してゐる雁金を救ふ目的で自動車とは全く縁遠い彼に、當座の間店の管理を頼んだのである。

私はついでに少し前へ戻つて雁金がこの夜杉生家へ私を同道して來た目的を話すことにしよう。實はこれは彼が私を連れて來たのではなく、私が彼を連れて來たのであるが、それまでにはなかなかややこしい複雑な話をしなければならぬ。

雁金の私に話したところによると、彼の家は東京近郊の縣下にあつては、その郡第一の資産家であり、代代勤王をもつて知られてゐる名門であつたとのことであるが、雁金

の父のところから資産は次第に傾きかかり、雁金の青年期には、彼が押坂家の司る商事會社の支配人の名目に置かれて他家の仕事に従事しなければならなくなつた。しかし、その土地では今なほ資産よりも名門を尊ぶ風習があつたから、彼が郷里にゐる間は生活に不自由することは何もなかつた。ただ雁金の野望は一重に家産の挽回にかかつてゐた。それより以前に雁金は一時期産業組合の購買係りをしてゐたことがあつたが、彼が押坂商事會社の支配人をやめた原因といふのも、つまりはそのとき貯へた彼の物價に對する研究心のいたすところといつても良いであらう。彼の不幸と狂氣に近い研究心とは、そのときから雁金を引き摺り廻してやめなかつたのである。

歐洲大戰が終ると間もなくわが國の物價は未曾有の奔騰を來たしたことは、今は誰でも知つてゐることであらうと思ふ。このころには、それらの物價の奔騰するさまは夢のやうなものであつたから、世の人人は一擲千金の夢につかれ、誰も彼もきよときよとして何事をしてよいものか全く仕事に手のつかない時代であつたが、購買係りをしてゐた青年雁金の満ちたる野望も、ひとしくこのとき爪を現してかかるべき襷にひつかからざるを得なかつた。ある日、彼

が新聞を見てみると、九升入の樽一本の醤油の値段が、十二圓に改定されたと發表されたことがあつた。そのころは最上の醤油が一樽三圓であつたときとて、この急激な四倍の躍進の仕方は、物價とその原料との間に大きく開かれた隙間に、突如として雁金をほり落してしまつたのである。

雁金はしばらくの間は、どちらを向いて良いのか見當さへつかなくつた。ただ彼はよち登つてひと儲けすべき好機の到來してゐることだけは感じるものが出來たが、時勢の特殊性を見極めるためには、あまりに彼は若すぎて無我夢中でありすぎた。そこで、彼は飛び上つた醤油の價格ばかりに爪を矢鱈と鋭く研ぎすましたままうろついてゐるときに、これも全く偶然なことには、丁度そのころを見はからつてのためであらう、ある新聞の廣告面に特許芋取醤油會社の、プレミアム附きの株式募集を見つけたのである。雁金の野望は直ちに再び、その好機に飛びついて足をぶらぶらさせ始めた。

その廣告面には、從來の醤油は小麦と大豆で造るがゆゑ、値段をはつてもひき合はないが、本社の特許は薩摩芋を原料としてゐるため、生産費はいままでの三分の一もかからない。たとへば一般製品の半額にて販賣するとしたつ

て、なほかつ五割の利益がある。しかもこの方法は本社獨占の專賣特許法によるものである。――

容易にぬけ上ることの出來ない不幸といふものを造るためには、自然は多くの場合、そのものの上に幾重かの計るべからざる偶然を選びよせて來るものであるが、雁金もまたこの例にもれず、このとき三度目の偶然が彼に向つて襲つて來た。それは、彼の近所に一代で百萬の産をなした成功者の一人に、芋から焼酎を取つたもののあつたことだつた。なほそのうへに、薩摩芋は雁金の郷里では多産であり、しかも小麦や大豆の一俵十圓もすることからくらべれば、薩摩芋はわづかに七十錢であつた。雁金の躍り上つた熱情は想像するにたくはない。彼はただちに芋取醤油の株式を決議して、その計畫を押坂の親戚にあたる杉生家に持ち込んだ。杉生家と雁金との關係はこのときからはじまつたのである。

杉生兵衛は資産百萬を越えるといはれる富豪であるだけに、雁金八郎の計畫にはすぐ賛意を表した。彼は雁金よりもさきから薩摩芋から醤油をとつてみたいとかねがね思つてゐたことであつたので、「これは神の引き合せだ。」とそのとき云つて、お負けに株の方は萬事自分が引き受けるか

ら特許權だけを一時も早く雁金に買収する工夫をしてきてくれるやうと頼んだ。特許の方のことは杉生家へ行くまへに、雁金がも早や方法をめぐらせて來たのであつたから、そのときすぐ兵衛に向つて、自分は芋取醬油の發明者と昵懇にしてゐるある銀行の支配人の弟といふ人を知つてゐるが、これは自分の小學校の校長であるから、もうその人に相談して來てあるので、紹介狀をいつなりとも貰ひえられる段取りまで出來てゐるといふことを話すと、杉生は「それはそれは。」と云つて、「私の伴も遊んでゐるから丁度良い。一緒にあなたとやりませうから、あなたも一つ出かけていつて向うの様子を調査して來てもらひたい。」と云ふことになり、雁金は杉生の子の薫と遠い山陰地方まで出かけていくことになつた。

二人はそこで時をうつさず山陰の湖のほとりにある風雅な町へ行くと、早速銀行の支配人に逢ひ、その紹介でいよいよ發明家の山崎俊介に逢つた。山崎俊介は容貌魁偉な人物で、發明家には何ぞ辯舌に爽かなところへもつて來て、遠來の客といふので、その土地一流の旗亭へ二人を案内した。率直無類の雁金と世間を知らぬ良家の長男とは、このへだてのない鄭重な響應のために、難なく餘裕ある思慮分

別をかき消してしまつたのである。殊に二人は事を一刻も早く決したくてならなかつた。この感情は遠方から來た事業家にとつては、何事よりも禁物の疲勞から襲つてくるところの悪癖であるにも拘らず、二人は根柢より先づその疲勞に足をさらはれてしまつてゐる自分の身の上は、容易に氣附くことが出來なかつた。なほ且つそのうへ、老獪な山崎俊介は、特許權の賣りつけに對してはすぐ贊意を表さず、二人の若者の心に先づ自身への信頼を植ゑつけんがため、自分の特許の缺點に念を重ねて説明し始めた。さうした後、徐徐に發明家がいか馬鹿な目に逢はされてゐる正直者であるかといふことを長々と語つて云つたのである。

「私の醬油は最初の發明でありまして、權利金三萬圓で今の會社に譲り渡したのでありますが、實に商人といふものは脱け目がございますね。上手いもんです。新歸朝者のフランス農學博士で豐永鐵之助といふ人を顧問といふことにいたしました。例の貴族院議員の重選運動といふやつにまんまと成功いたしますと、否應なしにその農學博士に一肌ぬがせまして、日本國中を各府縣別にして特許實施權といふやつを新しく附與させてしまひましたが、その収入があなた、それだけで百萬圓に近くなつてゐるのですからね。

實際に私が譲つた権利のおよそ三十倍になつたわけでございますよ。」

上には上があるといふ言葉は全くこの場合には興味が多いと思ふ。いつたいにからくりと云はれる人智の窮極を目ざして廻轉していく陥穽は、裏へ裏へと深刻に廻轉して行く度に、つひにはもとの表面へいつの間にか舞ひ戻つてゐるといふ具合のもののほどに深い自然さを感じるが、このときにも、山崎俊介の計畫は、はなはだ自然に巧妙に期せずして行はれていつたとも思はるべきところもあるにはある。しかし、彼の計畫の中には、第一の彼の發明よりも、第二の彼の發明の新たな権利を二人に賣りつけんとする欲望が、最後に隠されてゐたのであつた。彼は第一の發明の芋取醬油のことについては、あくまでも二人に斷念させんがために云つた。

「芋取醬油といふものは、實は芋ばかりでは出来ません。あれは大半は芋ですけれども、やはり普通の醬油のやうに大豆や小麦も少しは入れて使ふのでして、良質の醬油を造らうと思へば、どうしたつて豆が必要でありますから、廣告のやうには在來の半値で出来るといふやうなことは出来ませんね。芋取醬油はただ権利を賣るだけに都合が良いの

で、いざ製造となるとあまり感服出来ないものでしたから、それで私は僅に三萬圓で賣却いたしてしまひましたが、その代りに今度は別に豆だけで本當の力ある醬油の發明をいたしたいと思ひ立ちまして、目下製造中ですけれども、お蔭でたうとう成功しました、これは値段が同じ豆でも、ずっと安く出来るものです。」

それでは芋では駄目かとがつかりしてゐる二人にとつては、この第二の發明は初耳でもあり、當然なことにも思はれたうへに、何となく折角來た遠路の土産にもなりさうに感じられたと見えて、雁金と薫とは再びこの話に氣持が引き摺り込まれていつたのである。發明家の山崎俊介のいふところでは、その第二の新しい醬油といふのは、原料が隱元豆からとれるといふのであつた。隱元豆は當時大豆の半額であるといふことについては、豆類を専門とする押坂商事會社の支配人である雁金は、知りすぎるほど知つてゐたところであつたから、山崎俊介の説明はこのとき雁金には直ちに了解することが出来たのである。殊に山崎の説明した隱元の特長な成分をなすところの、小麦と大豆を混合したのと等しい蛋白質と澱粉とを含有してゐることや、醬油原料として不必要である脂肪を含まない隱元の特質に關

しても、彼はよく前から知つてゐた。

しかし、彼に降りかかつてゐるこの危機を一層深く失敗に導いた根元が、彼が隠元に對する知識をあまりに精しく知りすぎてゐたといふことにあつたことは云ふまでもないが、なほ一層悪いことには、彼はそのとき豆類のこととは反對に、これはまたあまりに特許法といふものを知らなかつたことにあつた。雁金は勿論のこと、やうやく中學を出た限りの知識よりない薫も、このとき二人は特許權といふものが製造方法にはなく、製造原料にのみ許され得ることだとばかり思つてゐたのである。つまり二人は、無謀なことにも、全く特許なるものが原料には絶対に許されないといふことさへも知らなかつたのである。そのため第一の山崎の發明にかかる芋取醬油も、芋を原料とすることにのみ特許を與へられてゐるものと思ひ込んでゐたのであつたから、第二に山崎から與へられた好餌にも、何らの疑ひも感ずることなく、ただ一刻も猶豫をしては他から原料特許の寶物を奪はれる氣づかひが一心に早まり、それに飛びついて直ちにその場で、雁金の居住縣下の實施權一萬圓の約定をすませ、約束手形で取引を終了すると、二人は濡れ手で粟の夢を見ながら揚揚として歸國して來たのであつ

た。

二人は歸つて始終のことを杉生兵衛に話した。杉生は二人の話をきくと喜んですぐ近在のある小驛の附近一帯の土地數萬坪を買收した。さうして資本金五十萬圓の特許醬油株式會社の創立にとりかかることになつた。雁金は押坂商事の支配人を辭職して、新たに設立された特許醬油會社の専務になつた。ところが、權利と工場豫定地の買收も無事にすまし、先づ成功の第一歩に踏み入れたときになつて、突然、株式のプレミアム附募集につきものの特許醬油の専門家の證明が必要になつて來た。そこで、杉生兵衛の友人にあたる銀行頭取の息子に、高等工業の出身者で、家業に専心してゐる優秀な醸造家の塚越逸作といふ眞面目な青年のゐたのを幸ひ、それに交渉したところが、逸作からもまた意外な應援を受けて、株の半額を自分みづから引受けても良いとさへ云ひ出すやうになつて來た。しかし、ともかく何よりも實地調査をしなければならぬといふので、また雁金は逸作と二人で山陰まで出かけていくことになつた。山陰へ着くと山崎俊介は、も早や杉生兵衛から手形を受けとつてしまつてあつた後だから、虚偽の暴露される損害は自身にはなく、二人の方にかかつてゐるときとて彼の養

應は前にも増して鄭重を盡してゐた。さて、いよいよ祕法の傳授となつて、二人は彼の研究所へ這入つた。その結果は、なるほど山崎俊介の説明したところは正しく、一點の偽りはなかつた。しかし、二人が宿へ歸らうとして研究所を出て來ると、塚越は聲を落して雁金に云つた。

「あれは君、結局は駄目です。第一あの男の仕事を見てみると、隠元を水に浸してから臼にかけて、それから皮をむいて、また蒸して麴にするのですが、机の上の仕事ならあのまま結構通りますけれども、とても何千石何萬石といふ莫大な仕事としちや、出来るもんぢやありませんからね。それにあの醤油は賣物になりませんよ。」

「どうしてです。」

雁金はまだこのとき、少しも成功を疑つてゐなかつたとさして、この思ひがけない塚越の聲を聞くと驚かざるを得なかつた。

「あの醤油は醤油らしい香りがありませんし、それに全然透明なところがない。」

「しかし、山崎先生は在來の日本の醤油は香りがあるので外國に賣れないのだが、あの醤油にはその缺點もないし、比重も二十七度もあつて本物の醤油をはるかに越してゐる

と仰言つてゐましたがね。」と雁金はまだ容易に裏切られた成功の不服から逃れることが出来なかつた。

塚越は自身が古來の醤油醸造の専門家であるだけに、自家の古い製品が、この突然に現れた新發明の優秀な製品に壓倒される念慮から、そのやうに云ひ始めてゐるものと臆測せられることを恐るるものごとく、雁金に精しく落ちつきはらつて醤油の比較をし始めた。

「外國へソースの原料として非常に澤山賣れていくものなら、それでも結構だと私は思ひますがね。しかし、さういふことは全く空想と同じことです。いま日本でもソースは澤山造つてをりますけれども、あれはつまり、醤油の香りのない番醤油と俗にいふもので、醤油粕に鹽水をぶつかけた一夜造りの安ものでして、それがどどん間にあつて出てゐますし、それにあの發明の醤油の比重の高いことにしたつて、あれは冒味が多いためにあるのではありませんよ。あれはつまり、隠元豆の溶けたどろどろの糊状態の混液があるために生じたものですから、不自然な現象なんです。あれぢや何の役にも立ちやしません。」

雁金はかういふ場合に於てさへ、全く子供のやうに正直一本で、人を疑ふといふことを知らなかつたから、いまま

塚越にそのやうに説明されると、もうどこからも逃げ出る道がなくなつてしまつたのである。彼は欺かれたとは氣附いたものの、それは所詮、順序を踏んで完全に瞞されるやうに出来上つてゐたのだから仕方がなかつた。彼はくるぐると廻る仕掛けのままに、最後まで辛抱強く落ち込んでいき得る典型的なタイプだつたのだ。彼はもう再びこのままは歸れないと思つた。自分の財産は全部使つてしまつたことは良いとしても、杉生兵衛の損害は莫大なものである。

思ふに雁金のこのときの淺黒い顔は、絶望のどん底にある無意識なときであるだけに、多分持ち前の善良な微笑が絶えずちらちらと早く唇のあたりに浮かびあがつては消えてゐたことであらう。勿論、彼とて這ひ上る最後の手段として、前に山崎から買ひとつた第一發明芋取醬油會社の眞似をして、權利金の損害をさらに逆手をうつて三倍にし、いま一度二萬圓をなげ出して、山崎から全國縣別の實施權を買ひとつたなら、このさいの損害は、數倍の利得となつて返つてくるといふことは心得てゐたにちがひあるまい。しかし、その山崎から受けた虚偽を元利として、二倍の虚偽を行ふ惡辣な行爲は、たうていこのとき雁金の出来ることではなかつた。察するところ、芋取醬油會社も山崎の

奸策に落ち込んだ苦しまぎれに、にはかに狼狽したあげくの果、つひにはその惡計を思ひめぐらさざるを得なかつたのにながひなからう、惡策は苦痛から生れなければ、世のからくりといふものは、そのやうに巧みに陸續と噴出して来る道理がないと思はれる。このことは後に他から聞き知つたことであるが、芋取醬油會社の實施權を買ひとつた富豪たちは、全國いたる所で頻頻として破産しつづけていつた。この事件は、當時の戦後の財界に少なからぬ波紋を描いたこととて、今はあまねく知れわたつてゐることであらう。

雁金もいまその一つにひつかかつて尻もちをついてゐるのだが、しかし、かういふ絶望の窮極の果てに落ち込むと、その結果、人間は本來の性質を勃然と持ち上げて来るものとみえて、このときから雁金の精神は、も早や落ち込む必要のなくなつた純粹な希望に鋭く燃え立つていつたと見てもよからう。けれども、ここに彼には一つ見逃すことの出来ぬまた別個の精神があつたのである。それは彼が名門の産だといふことだ。絶望の果てには、名門家といふものは私たちの想像を赦さぬほど、祖先から貫き流れて來たその家系獨特な紋章の背光のために、行動も自然に獨目の

姿となつて來るといふことは、私は一つの不思議な現象だと思ふ。雁金には常常から家系が代代勤王をもつて鳴つてゐたために、彼の行爲には、國家といふ觀念が大海のやうに押し迫つてゐたことを私は見受けたが、しかし、彼の國家に對する觀念は、まだ民衆から獨立した巨大な別個の存在のもののごとく映つてゐたと思はれるふしがあつた。けれども、彼の頭に國家がそのやうに印象されてゐたといふことは、彼の行爲の上では、およそ何事によらず、ただ自身が正しいと直覺したことのみに幕進するといふ勇壯果敢な表現をとつて少しも怪しまなかつたところに影響した。

私は彼がいかに蟄居してゐるときを考へても、彼から不正な感情を抱いたときの表情を想像することが困難である。もし日本精神といふものの實物があるものなら、私の知つてゐるかぎりには、先づ雁金の相貌と行爲とを考へずしては容易に考へ得られることだとは思へない。他の人の顔には、西歐から流れて來てゐる知識の副産物であるところの、疑ひの片影が、どこかに必ずつきまとつてゐるのを私たちは感じる。この意味では、今ほどヨーロッパ精神が日本精神を輕蔑してゐる時代はないであらう。——雁金のその後の惡戰苦闘も、根元はことごとくこの世人の輕蔑

から始つてゐるといつても良かつた。

雁金は萬事休したと知つた後に首を上げて云つた。

「いま北海道に出來る鹽元豆は本當に安いのですが、これをどうかしてうまく改造していく工夫はないものでせうか。」

「さうですね。あの山崎の醬油に香りがついて、透明にさへなれば良いわけですから、先づいまのところは何といつても、發明以外に方法はないでせう。」

「しかし、あの鹽元を醬油の原料とするといふことは、山崎さんの特許でせう。」

「いや、それや間違ひですよ。」と塚越は雁金を見あげて云つた。「山崎の醬油は鹽元豆を水に浸してゐるときに、酸を加へて鹽元特有の臭氣を除くといふ、つまり何んです、酸を使ふそのことが特許なんです。原料を特許にするといふことは、法律上許されないことですからね。」

雁金は急にこのときから、生き生きとした微笑をもらし始めて何ものかに飛びかかつた。

「それぢや、私のやうな素人でも、鹽元豆を使つて醬油らしい香りと透明さへ出せば、特許になるんですか。」

「それや勿論あります。それに發明などといふものは、案

外に素人のはうが良いものです。私のやうに深入りしてしまつたものには、恐ろしくつて理論以外に進むなんてことは、容易に出来るもんぢやありませんが、そこは素人の有りがたさで、むやみ矢鱈といろんなことを無茶苦茶にやりますから、それが犬も歩けばで、たまにやあたることがありますからね。」

雁金はこのときから急激な傾き方をして精神の方向は定められていつた。彼は兩手を膝の上に乗せ變へると持ち前の早口で云つた。

「塚越さんはこれから郷里へ歸れますが、私はこのままではもう歸れせんからどうぞあなたお一人でこれからお歸りを願ひます。私は鹽元を原料にして立派な醬油をとることに成功するまでは、郷里の土は絶対に踏まない決心をしました。」

塚越は彼の今後の行動もその決心以外にはないと思つたらしく、

「さうでせうね。あなたとしましては。」と云つてからしばらくは黙つてゐたが、

「ぢや、あなたの決心に私もお手傳ひする意味で、一つ私の經驗をお話しますますが、私が學校を出まして家に歸つ

てからは、人知れずさんざん苦勞をこれでしたんですよ。と云ひますと、何んですが、私は滿三年間といふものは夜の三時に起きたんですが、これといふのも早起きの習慣があるわけぢやなく、さういふ事情が突發したんですがね。つまり、學校を卒業すると理想に燃えてゐたんですから、すぐ倉男を解雇しまして、思ひ通りの仕事を新式にしようとかうまア決心しましてね、麹部屋に寒暖計をかけまして、學校の先生から教はつた講義のままに麹を造つてみましたが、どうしても前のやうな黄色な麹が出来ないで、いつも眞黒な麹がついて仕様がななんです。それでその黒麹を他人に見られるのが嫌さに三年間こつそりと早起きをしてづづけて、まアやつと誰にも見られずに仕事をどうやら終りました。が、寒暖計なんか全く馬鹿馬鹿しいもんです。酒や醬油といふものは、全く學説通りにはいかないもんです。何より經驗が第一で、どんなに醸造學の大家でも學校出のものは理窟だけは立派につけますが、實際に良い酒や醬油を造るものは、やつぱり理窟の何も分らぬ倉男です。だから、あなたも心配せず熱心にやつてごらん下さい。一心岩をも通すといふこともありますからね。まア一つやつてみられるのも良いでせう。」